

序

センター長に就任してから早くも1年が経とうとしている。本年度は、春先の低温に始まり、夏季の低温・低日照、秋冬季の高温・多雨と、不順な天候が続いた。このため、果物の結実や品質が劣ったり、秋野菜の収穫が半月以上も早まったりした。また、北海道や東北地方では冷夏のため水稻が著しく不作であったが、幸いなことに本センターではその影響は小さかった。このように本年度は、作物生産が異常気象に大きく影響された1年であったが、センターの運営や活動でもいくつかの大きな出来事があった。

すなわち、センターは本年度、中国・四国地域大学附属農場協議会の幹事校に当たった。このため、7月30・31日の両日、隣接する「つしま苑」で協議会を開催し、「地域開放事業の取り組み」や「外来者への対応」等について協議するとともに、技官の体験発表を行った。また、センターの岡山農場と赤磐郡山陽町の農機具メーカーの見学会もあり、密度の高い協議会を開催することができた。地域協議会に加え、今年も春と秋の2回、全国大学附属農場協議会が開催された。全国協議会は、平成13年に「農場等の教育・研究支援への貢献及び農場等の活性化に特に功績のあった技術系職員」を表彰する「大学農場技術賞」を制定している。本センターから推薦していた技官が今回初めてその栄誉に輝いた。まことに、御同慶の至りである。ところで、大学農場における近年の大きな変化は農場のセンター化で、平成15年4月現在、全国35国立大学附属農場のうち21農場がセンター化している。また、全国農学系学部長会議の附属施設のあり方に関する検討ワーキンググループは「附属施設のあり方に関する検討報告」をまとめ、農学系附属施設の具体的な役割を提言している。大学の法人化とも関連して、附属農場に新たな機能や役割を求める声が増大しつつあるが、大切なことはその名称が「農場」であろうと「センター」であろうと、それが何をなすべきところであるかを自覚することと考える。

センター化して2年目の今年、新しい体制で実習がスタートした。すなわち、従来の実習科目に加え、農学部以外の1・2年次生を対象とした農場体験実習、農学部の2年次生を対象とした農家体験実習等を実施した。初めて開講した科目であったが、受講生からは高い評価が得られ、一安心といったところである。しかし、実習の科目数が増えた分、専任教員の負担も増えたわけであり、今後、それらをどのように整理していくかが重要な論点になろう。

附属農場をセンター化した目的の一つは地域連携の推進で、このためセンターには企画連携部が設けられた。これは、農家、企業、市民等の地域社会と農学部をつなぐ窓口としての機能を有している。しかし、農学部公開シンポジウムやセンター講演会の開催を除いては、これまでその機能を十分に発揮してこなかった。これは、農学部の教員がどのような地域貢献をしているかが把握できていなかったためである。そこで、先生方の地域連携の実績を記録にとどめ、また各先生の研究のキーワードをデータベース化し、キーワード検索が可能なシステムの構築が必要と考えた。これにより、学外から共同研究、講演、技術支援等の依頼があった場合、キーワードを入力するだけでそれをどの先生にお願いすればよいかが即座に判断できるようになる。本号では、先生方のご協力により「平成15年度の地域貢献・国際貢献の実績」を取りまとめることができた。お忙しい中、調査にご協力頂いた各位に厚く御礼申し上げる。将来、この資料がさらに充実するとともに有効に活用されることを願ってやまない。

平成16年3月

農学部附属山陽圏フィールド科学センター

センター長 久保田 尚浩